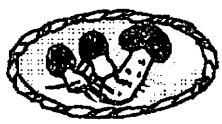
『ONE BOOK ONE LIFE』別冊号1986年9月10日第１号発行

ろくおん通信

No. 105

発行日 '98年９月15日
発 行 盲人情報文化センター
録音製作係

処理を考える（３１）



9月

図・表・写真などの処理　その５

今回から数回にわけて、近畿視情協録音図書製作グループ連絡会の勉強会で「図表の処理」について講演された久保洋子氏の講演を掲載します。

私がテープ作りのボランティアを始めてから十数年になります。小説や随筆が上手に読めなくても、少し勉強した理系の本を読めたら、私でもお役に立てるのではないかというのが動機でした。先輩の方々も、図や表のある理系の本を読んでいる方はいらっしゃらなくて、ほとんど私の独断と偏見で、それにリクエストの責任者だった清水さんとあれこれ議論しながら読んでいました。何年か経って私なりの考えが固まって来まして、少しはまとめてみたいと思って作ったのが「図・表の読み方」です。最近は録音製作委員会の理数チームで二ヶ月に一回定期的に会合があって、色々な方の貴重なご意見をいただく機会もありますが、それまでは本当に一人という感じでやって来ましたので、一人の考えには当然偏りも限界もあります。「図・表の読み方」については皆様のご批判をいただければ嬉しいと思っています。

私たちのテープ作りという仕事は、活字というメディアで提供された情報を音というメディアに変換する仕事だという風に考えられます。活字には活字故の制約があります。私たちは何気なく読んでいますが、読点、句点、段落、タイトルの大活字など、これらは活字の世界の約束事です。こういう約束事をすべて無視して、点もマルも段落も何もない本を作ったとしても、読者に受け入れられることなく終わってしまうでしょう。同じように音の世界には音の世界の制約がたくさんあります。例えば墨字の本でしたら、ちょっとページを繰ってみただけで、挿し絵があるとか写真が載っているとか、図や表がたくさんあるとか、すぐにわかります。でもその本を読む時、これこれの写真がありますと言ってみても、それは今まで本文を読んでいた声と同じ声で言っているわけで、本文と際だって違ったものにはなりません。墨字の本の中の挿し

絵や写真、図などは本文と際だって違ったものですが、テープにするとそうはいかないということです。

又、墨字の本を読む時には前のページの図、巻末の表などを本文を読み進む途中で何度でも見直すことが出来ますが、テープでは前の方にあった表をもう一度聴いてみたいと思っても、手間暇がかかるわけです。近い将来デジタル化されることになれば、この点は簡単に解決することになって、私たちは作り方を改めて考え直すことになると思いますが…。現状では細長い紐に順番に声を入れているわけで、本のページを繰るように簡単に元に戻ったり先へ進んだり出来ない、これは私たちがテープで本を作る上での大きな制約です。こうした制約を踏まえて、では図や表や写真のある本を、どういう風に作っていけばいいか、基本的な考え方をお話したいと思います。

つづく

先月の例文の処理例

前回の練習問題は表記が問題になっているケースでした。文章自体が表記を問題にしているようなケースは多々ありますが、これまで、そのまま読んでは意味がわからないような時は、一旦語句を読み、後で補足しながら読むという処理が多かったと思います。しかし、今回のような文章をこの方法で行うとなかなか分かりにくい音声訳になってしまいます。これは、書き方を問題にしている様な文章は聞き手は内容を考えながら聞いていますが、音訳者の補足が一旦「思考」を止めてしまうことになるからです。思考が中断されないでよくわかるよう音訳者の補足を研究する必要があります。

今回のような場合は語句を特定する言葉を先に補いながら読む方が断然わかりやすくなります。私たちが文章を読み進めていく時は語句を先に区別しながら読んでいるわけですから、音声訳の場合もそれに近い読み方をするとよくわかるわけです。ちなみに先に語句を区別しながら読んだ文章は５０％早くして聞いても内容を理解しながらきくことができます。

※ 下線部分が処理の必要な個所

練習問題１

とにかく、ワープロを使ってみた私は、そいつが突拍子（とっぴょうし）もないあて字を出してくるので笑ってしまった。ためしに、<u>「わはははははは」と打って漢字変換してみたら、</u>

ちょっと考えて（あの、ちょっと考えるかの如き間があくのもおかしい）「和は母は母」という漢字にしてきた。思わず、和は母は母、と笑うわけである。

そこで私は『ワープロ爺さん』という、そいつの面白さを利用した小説を書いたのだった。ギャグはほとんどＯＡＳＹＳがやってくれるので、実に楽であった。「このいえにすんどる」を、「個の家二寸＄」と書くなんて、作家でもちょっと思いつかないぞ。あの小説の中で爺さんがワープロのことを、ホープロと書いているところがあるが、あれは親指シフトのキーをよく見ればわかる通り、「わ」と「ほ」が同じキーだから起こるミスである。その辺、よーく読むと細かいのだ。

ポイント１　（　）内の「あの、ちょっと考えるかの如き間があくのもおかしい」の文章をどう処理するか。

ちょっと考えて「和は母は母」という漢字にしてきた。という文章がカッコの文章が入ることで切れてしまうので、「ちょっと考えて」まで戻って読む方が意味が通りやすいでしょう。

ポイント２　「和は母は母」の読み方をどうするか。

「わわ、ははわ、はは」と読んで字の説明をすると少しくどい。原文は「○○」という漢字にしてきた。とあるから、つまり書き方を問題にしているので、いきなり、「平和の和、ひらがなのは、漢字の母、ひらがなのは、漢字の母、という漢字にしてきた。思わず、和は母は母と笑うわけである。」と読む方がわかりやすい。

ポイント３　「個の家二寸＄」の読み方

これも表記を問題にしているので、「このいえにすんどるを、一個、二個の個、ひらがなのの、漢字の家、一寸二寸の二寸、＄マーク、個の家、二寸、ドルと書くなんて・・・・」

練習問題２

「価値感」か「価値観」か

「使命かん」や「価値かん」などの「かん」は「感」と書くか「観」と書くか迷う人が多いようです。

「感」は、安心感・意外感・罪悪感・正義感・満足感などのように使われ、そのようになっている感じ、気持ちを表しています。

また、「観」は人生観・世界観・女性観・文学観などのように使われ、その物事についての見方、考え方を表しています。

では「価値かん」はどちらかというと、「価値感」と書く人も多いようですが、

「価値のあるなしについての見方、考え方」というほどの意味ですから、「価値観」とすべきでしょう。

「使命かん」は「課せられた任務などをどうしても果たさなくてはならないという気持ち」で、「使命感」です。

「無常かん」は「感」と「観」の双方があてはまり、その使われ方によって使い分けるのがよいでしょう。つまり、「友の突然の死に無常かんを覚える」のように、「はかない感じ」の意味で使われるときは「無常感」「仏教思想における無常かん」のように「考え方」のニュアンスが強いときは「無常観」となります。

ポイント　「かん」が二つでてくる。どちらの「かん」かをいちいち考えなくてもわかるような処理が必要。また、熟語がたくさんでてくるので、熟語で補足すると混乱する。

最初に、項目を読んだときに、「はじめのかんは、かんじる、後のかんはみる」と補足し、あとは「感じるかん」と「観るかん」と読んでいく。本文中の「価値感」、「価値観」「使命感」の読み方も書き方を問題にしていますので、「かんじる、価値かん」、「みる、価値観」、「かんじる、使命感」と読む方がわかりやすい。

練習問題３

「油」と「脂」どう違う

「油」と「脂」の違いは常温で固体かどうかということ。「油」は燃えやすく常温で液体状のものを指し、「脂」は常温で固体状のもの、動物の脂肪を指します。

身のまわりの物でいえば、サラダオイルや液体整髪料などは「油」、ラードは「脂」です。

また、「油」も「脂」も比喩的にも使われます。「火に油を注ぐ」「油気のない髪」「脂汗」「脂ぎった顔」「脂足」「脂の乗った年ごろ」などがその用例です。

同じ「あぶら」でも、髪の場合は「油」、顔や足は「脂」というわけです。

ポイント　どちらも「あぶら」ですから、「さんずいのあぶら、にくづきのあぶら」とへんで区別する。「ゆしのゆ、ゆしのし」といった熟語で区別すると本文が分かりにくい。

「火に油を注ぐ」「油気のない髪」「脂汗」「脂ぎった顔」「脂足」「脂の乗った年ごろ」→表記を問題にしているので、「さんずいの、火に油を注ぐ、油気のない髪、にくづきの、脂汗、脂ぎった顔、脂足、脂の乗った年ごろ、などがその例である。

今月の練習問題

※　ルビの処理

ソーセージ

垂直姿勢の訓練が終わると、僕のところには、毎日ストレッチャー係がやってくる。そうして僕を、リハビリ・ルームから病室へ運び、ストレッチャーをベッドに横付けする。僕はそのまま、今度は介護士が来てベッドに寝かせてくれるのを、待つ。

そして、正午。これまた同じストレッチャー係が、やはり毎日、「たっぷり召し上がれ」と、慎重に、快活に、声をかけに来る。何もなければ、これで彼の今日の仕事は終わりだからだ。だが僕にすこやかな食欲を願うなど、八月十五日に「メリー・クリスマス」と挨拶するのと同じ、真昼に「おやすみなさい」と言うのと、同じ。

この八カ月の間に僕が飲み込んだものといえば、数滴のレモン水と、小さじ半分のヨーグルトだけだった。しかもヨーグルトは、大きな音をたてて、気管のほうへ入っていってしまった。病院側は「食事テスト」などと大げさに言っていたが、結果ははかばかしくなかった。でも大丈夫、僕はひもじくはない。胃につながれた管に、小瓶二本分か三本分の茶色っぽい物質が流れてくれば、それで一日に必要なカロリーは摂取できるのだ。

楽しみのためには、匂いや味についての、鮮烈な記憶をよみがえらせてみる。それは決して汲み尽くしてしまうことのない、人間の感覚の貯水池だ。残り物をうまく料理するコツがあるように、僕は今、思い出をじっくり煮込むコツに、磨きをかけている。

さて、その思い出の世界では、僕は今や、何を遠慮することもなく、何時にでも、食卓につくことができるわけだ。レストランに出かけるにしても、もう予約の必要はない。そして自分で料理をすれば、いつでも大成功。牛肉の赤ワイン煮はほっくりとやわらかいし、ゼリー寄せは透明で目にも美しく、アプリコット・タルトからはさわやかな甘酸っぱさが香り立つ。気分によっては、エスカルゴを十二個と、シュークルート（酢づけのキャベツ）とソーセージ、それにいわゆる遅摘みの、金色がかったアルザス・ワイン「ゲヴュルツトラミネール」を奮発してもいい。

あるいはごくシンプルに、バターを塗ってこんがり焼いた薄いパンを、半熟卵に添えて味わうのもいい。ああ、なんというごちそう！色あざやかな黄身が口いっぱいにとろりと広がり、ほのかにあたたかく喉を下りてゆく。消化のことも、ここでは気にする必要はない。

もちろん、素材はどれも最高級の品を使う。最高に新鮮な野菜、海から上がったばかりの魚、最上の霜降り肉。そうしてそれらを、最適の方法で調理する。そうそう、念のためにと友人のひとりが送ってくれた、シャンパーニュ地方に伝わるソーセージのレシピもあったっけ。三種類の肉を、紐状に細長く切って詰めるのだ。

四季のリズムと旬も、尊重したい。今なら口をさっぱりさせるには、メロンと赤い実の類いに限る。いちご、カシス、フランボワーズ。牡蠣(かき)と猟肉(ジビエ)なら、秋まで待たねばならない。その頃もまだそうしたものが、好きならばの話だが。なにしろ僕は、だんだん禁欲的というか、淡泊になってきているのだから。

この病院で長い断食に入った最初の頃は、ものが食べられない欠落感から、僕は空想の中の食料戸棚を、絶えずのぞきに行かずにはいられなかった。まるで過食症だった。だが今は、ネットに詰められた昔ながらのソーセージさえ、あればいい。そしてそれは、僕の頭の中の片隅に、いつもぶら下がっている。たとえば、粗く刻んだ肉でこぼこしている、ピリッと辛口の、リヨン産サラミソーセージ。薄く切って口に入れると、舌の上でわずかにとろけるような感触が広がる。そして噛んでみると、これまた絶妙の味わいなのだ。

『言葉に関する問答集』より　文化庁編

問：「入り口」は「イリクチ」か「イリグチ」か

答：「出口」はデグチとしか発音しないのに、その対語である「入り口」は、イリクチ・イチグチの両方の発音が並び行われている。一体、どちらの発音が望ましいかという問題である。

結論から先に言えば、イリクチとイリグチは、昔も今も併用されていると考えられ、どちらか一方をよしと判定を下すことは困難である。

まず、手近にある辞書類がどのような扱いをしているかを調べてみよう。

▽　イリクチを見出しに掲げたもの（イリクチを主とし、イリグチを従としたものには　＊印を付けた。）

日葡辞書［Iricuchi］和英語林集成（初版）［IRI-KUCHI］　言海　日本大辞書　大日本国語辞典　広辞林　大言海　大辞典　辞海　大漢和辞典　講談社国語辞典（改訂増補版）　新潮国語辞典（新装・改訂）　＊国語大辞典　＊言泉

▽　イリグチを見出しに掲げたもの（イリグチを主とし、イリクチを従としたものには　＊印を付けた。）

明解国語辞典（改訂版）　岩波国語辞典（第四版）　新明解国語辞典（第三版）　＊三省堂国語辞典（第三版）　＊日本国語大辞典　＊角川新国語辞典　広辞苑（第三版）　＊研究社・新和英大辞典（第四版）　＊現代国語例解辞典　＊新選国語辞典（第六版）　大辞林

▽　イリクチ・イリグチ両者を併掲したもの

NHK編・日本語発音アクセント辞典

以上の辞書で見るかぎり、古くは十七世紀初頭の『日葡辞書』から明治・大正を経て昭和の第二次大戦終了前後まではイリクチが優位を占め、戦後の辞書はイリグチを主見出しとするものの多いことがうかがわれる。（特に、『広辞苑』は、第二版まではイリクチを主見出しとしていた。）

「胃＋ふくろ→胃ぶくろ」「雨＋かさ→雨がさ」のように、語の複合が行われる場合に、後に続く語の頭音が清音から濁音に変わる現象を、「連濁」と言う。現代の日本語の複合語の中には、連濁を起こす場合と、連濁しないで元のまま清音で発音する場合とが並び行われていて、どちらがよいか決定し難いものが多い。例えば、『NHK放送のことばハンドブック』（昭和62・4刊）所収「誤りやすいことばの読み」の中で、「放送ではどちらの発音を使ってもよい」としたものの中に、次のような例が見える。

アトクサレーアトグサレ　ウケクチーウケグチ　エツケーエズケ　カザハナーカザバナ　カセンシキーカセンジキ　カタクルシイーカタグルシイ　ツツウラウラーツズウラウラ　ハヤテマワシーハヤデマワシ　ヒキフネーヒキブネ　ホシクサーホシグサ　ヨコタオシ　ーヨコダオシ　両刀ツカイー両刀ズカイ　ワカシラガーワカジラガ　ワルクチーワルグチ

なお、右の清濁の対立の中には、東西両方言の差の影響があるかもしれない。というのは、連濁現象とは言えないものも含めて、東西の発音で清濁の差のある語が、次のように幾つかあるからである。

（東京）	（大阪）
カカシ（案山子）	ーーカガシ
カカト（踵）	ーーカガト
カツラ（鬘）	ーーカズラ
センタク（洗濯）	ーーセンダク
カキトメ（書留）	ーーカキドメ

ヒモトク（繙）　ーーヒモドク

・・・・・・・・・・・・・・・・・

ムズカシイ（難）ーームツカシイ

オンナジ（同）　ーーオンナシ

ところで、連濁が起こる場合の法則性については、学界でも様々な議論があり、以下のような点が指摘されている。

(1)　熟合度の強いものに起こりやすい。

（例）　ヒト→コビト。タビビト。

カサ→ヒガサ。アマガサ。

(2)　用言と用言との複合では、連濁が起こりにくい。

（例）　オイカケル　キキコム　ツミカサネル

(3)　複合語の前部分が、後部分の目的格である場合は、副詞的修飾格のときより連濁しにくい。

（例）　カンパンカキ　フロタキ　メシタキ　←→　タテガキ　カラダキ

(4)　前部分と後部分が対等の資格を持つときは連濁しにくい。

（例）　タハタ（田畑）　ヨミカキ　←→ ムギバタケ

シナガキ（品書き）

〈注〉　山や川の場合はヤマカワ、山中を流れる川の場合はヤマガワ。

(5)　擬音語・擬態語は連濁しない。

（例）　カンカン照り　チラホラ　ソヨソヨ

(6)　前部分の末尾が撥（はつ）音のとき最も連濁しやすく、長音の場合はこれに次ぎ、促音の時は連濁しない。

ユンデ（弓手）　カンザン（換算）

トッテ（取っ手）　トッツキ（取り付き）

(7)　後部分の第二音節が濁音の場合は、連濁しない。

（例）　マルハダカ　アイカギ　オオカゼ

以上が連濁についてこれまでに指摘されている法則である。ただし、これらのことは大体の傾向として言えるのであって、もちろん例外は幾つもある。

「入口」の例は、和語動詞が名詞に結合した型であるが、以下には一般に「クチ」を後部分に持つ複合語について、それが連濁するかしないかを、語構成の型ごとに検討してみよう。ただし、「口」の意味は、出入りするくちもあり、口することばもあり、いろいろあるが、これは今区別しない。

以下、(1)～(6)までの各項について、○印が連濁しないもの、●印が連濁するもの、◎印が両様の言い方の併存するものを示す。

(1)　数詞＋クチ

○　一（ひと）口　二（ふた）口　三（み）口　……　十（と）口　八つ口

●　一人（ひとり）口　二人（ふたり）口

(2)　和語名詞＋クチ

○　後（あと）口（ーが悪い）　片（かた）口　火（ほ）口　水（みな）口

●　秋口　糸口　おちょぼ口　表口　裏口　大口（ーをたたく）陰口　肩口　勝手口　傷口　木戸口　口々　小（こ）口　鯉（こい）口　ざくろ口　仕事口　袖口　滝口　手（て）口　戸（と）口　鳶（とび）口　とんがり口　ひょっとこ口　間（ま）口　窓口　曲がり口　水（みず）口　鰐（わに）口　東口西口　南口　北口

(3)　和語動詞＋クチ

○　合い口（匕首）売り口　売れ口　折れ口　切り口　吸い口　取り口（相撲の一）　飲み口　やり口

●　悪たれ口　通い口　汲み取り口　差し出口　焚（た）き口　告げ口　勤め口　出口　出入り口　取り入れ口　にじり口　のぞき口　働き口　湧（わ）き口

◎　上がり口　入（い）り口　入（はい）り口　登り口　下がり口　攻め口（攻め方の意の場合はセメクチ、敵を攻めにかかって向かう場所の場合はセメグチ。）

(4)　和語形容詞＋クチ

○　甘口　薄口　辛口　軽口　濃い口　早口　うま口

●　ーーー

◎　悪口

(5)　連語＋クチ

○　あいた口　序の口

●　憎まれ口　へらず口

(6)　漢語名詞＋クチ

○　無（む）口　先（せん）口　別口

●　改札口　下山口　玄関口　地口　蛇口　就職口　出札口　昇降口　乗車口　電話口　投入口　登山口　二字口　非常口　奉公口　無駄口　路地口

こうして見ていると、大半の「ークチ」は、清濁いずれか一方に定着しているようであるが、◎印の語に限っては、両方の言い方が並び行われていると考えられる。

なお、国立国語研究所が昭和三十年度に各方面の専門家を対象に行った「語形確定のための基礎調査」の中に、イリクチ・イチグチのいずれを標準語形とするかという問いが入っている。その結果を見ると、次のようになっている。（『国立国語研究所年報７』参照）　採る形として「イリグチ」が多数（55%～79%）。採る理由としては、言いやすい51%、一般的31%、語感がよい18%、共通語的・口語的・望ましい体系を作る、各13%、伝統的・変化の傾向にそう、各10%。

などが報告されている。

利用者から製作依頼を受けている原本

『部落起源論』石尾芳久著 <社会科学>
『田中角栄の遺言』小室直樹著 <政治>
『ニュースキン「新たな夢」へ』上之二郎著 <油脂類>
『ネットワークビジネス』ドン・フェイラ著 形山淳一郎訳 <油脂類>
『魂の絆』トマス・ケリー著 中津悠訳 <小説>
『ノモンハンの夏』半藤一利著 <日本史>
『社会福祉の歴史』高島進 著 <社会福祉>
『真理の言葉』大川隆法 著 <宗教>
『三本の矢 上』榊東行著 <小説>
『三本の矢 下』榊東行著 <小説>
『民法（5）契約総論』第4版 遠藤浩他編 <法律>
『民法（6）契約各論』第4版 遠藤浩他編 <法律>
『おなら大全』ロミ＆ジャン・フェクサス著 <民族学>
『魂の幼児教育』 としくらえみ著 <教育> 100頁
『幼児のための人形劇』ﾌﾗｲﾔ･ﾔﾌｹ著 高橋弘子訳 <教育> 125頁
『ディスカバリー世界の実相への接近』<宗教> B5判 308頁
『世界史B98年度用大学入試ｾﾝﾀｰ試験超対策問題集』

以上のリストは、読者から音声訳の依頼を受けている本です。引き受けて頂ける方がありましたらご連絡ください。初めてのグループの方は何か5分でも結構ですから録音したものをご持参下さい。録音についてのチェックと共に、必要があれば録音技術のアドバイスをさせていただきます。

今回引き受けて頂いた原本とグループ

『正統の哲学 異端の思想』 中川八洋著<西洋哲学	ICCBﾘｸｴｽﾄｸﾞﾙｰﾌﾟ
『ケアマネジメント』竹内孝仁著<社会学>	〃
『太宰治と聖書』野原一夫著 <政治>	えくてもあ
『囚人同盟』デニス・リーマン著 中井京子訳<小説>	〃
『スロー・リバー』ニコラ・グリフィス著<小説>	〃